

駿河湾魚類追加及び附記(第17)*

黒田長禮

Additions to the list of the fishes of Suruga Bay—XVII

Nagamichi KURODA

当湾産魚類追加も回を重ねること16回に及び、今又その17回を発表するに至った。
新追加は7種で、これにより当湾及び沿岸の淡海両魚の種数は895を算えることとなった。

54'. ニジマス *Salmo gairdnerii irideus* GIBBONS.

駿河湾沿岸地方所々、例え富士宮市、白糸滝附近、須走等で養殖し又は放流して成績は良好である。所々に鱈釣池が設けられ、食用として大いに悦ばれている。夫故この魚も当然本目録の一員と認められる。最大は1,000 mmに達するが、多くは其半以下であり、時に白変や黄白変の個体が生じ、頗る美しい。

71'. ハナレハダカ *Diaphus tanakai* GILBERT.

1963年8月29日11号台風の朝志下に打揚の1小魚を拾得した。これは明かに駿河湾新追加である。全長38.5、体長33、体高6.5 mm.

新鮮色：殆ど黒色、殊に尾柄が濃黒色。顔と体側は鮮かな銀白色。虹彩淡黄銀色。発光器は黒縁の淡青色。

特徴：コビトハダカ (*D. rafinesquei* (Cocco)=*fulgens* BRAUER=*nanus* BRAUER) に似るが第3肛門上部発光器は第2の垂直にあること、後部則発光器は前臀鰭発光器の直上にあること、尾部基底発光器はその前のものとの間に大なる距離にはなれること等にある。即ち第3腹部発光器は上位にあり、腹鰭上部発光器及び第2肛門上部発光器並びに前臀鰭発光器の最前のものと同一線上に位置すること。尾部基底発光器の第3と第4が大いにはなれるため第3は第1と第4との全く中間に位することを特異の点とする。

従来は九州南部沿岸 (31°10'30"S., 131°58'30"E. 300 fathoms の網で3点獲られた) 模式標品は全長21 mm.、体長16 mm. のもの。

114'. ゼニタナゴ *Pseudoperilampus typus* BLEEKER.

1961年8月25日沼津市千本水族館 (1960年より海魚は収容されなくなった) に本種数尾があった。この魚の自然分布は北日本 (山形・群馬・千葉・東京等) で、南は相模馬入川上流 (相模川) 附近迄とされた (田中, 1933)。それで近年処々に移入されたものであり、静岡県下にも入ったのであると考えられる。

226'. アブラソコムツ *Lepidocybium flavo-brunneum* (SMITH). Syn.—*Xenogramma carinatum* WATE.

1963年8月15日に志下に水揚げされた目測全長 ca. 600 mm の1尾を海岸で見る。これは

* 第16は「動・雑」70 (3): 92-97, 1961 参照。魚の和名の前の番号は目録 (1951) に追加の位置を示す。

己に両側面の肉をおろして取り去ったものであった。頭前方は黒褐色が強く吻尖り、眼が大きく虹彩は白色で爛々と光っていた。高知方言タヌキとは顔の容貌から適切な名のように思われた。尾柄に 1 隆起があるのが特徴であり、又今回は見られなかったが側線が特殊波状を呈するという。

バラムツ (*Ruvethus pretiosus Cocco*) との違いについては蒲原、富山・阿部、檜山・安田等諸氏の図などで明かである。バラムツ (タマカマス) は己に以前報告済みである。

466'. ショウサイフグ *Fugu vermicularis vermicularis* (T. & S.)

1963 年 7 月下旬黒田長久により志下で拾得した 1 尾は全長 210 mm. 「阿部氏によると最大 340 mm になる由」。

特徴—A. 白色、C. 下縁も白い。P. に近く大黒斑がない。体側には明瞭な 1 黄帯が通る。肉眼で見える棘はない。体の斑紋はマフグ (ナメラフグ, *F. v. porphyreus* (T. & S.)) の幼魚に似るが、P. 近くに黒大斑のないことで直ちに区別される。但し此標品ではそこに綫の灰色の稍々大きい円点が他の斑紋と区別されて存在するその数 7 点。

従来マフグの幼と誤っていたもので、今回のショウサイフグを得たのであり、少くとも私には駿河湾は新追加地と思う。

550'. ホシセミホウボウ *Daicocus peterseni* (NYSTRÖM).

1962~1963 年に原下方面で漁獲の幼魚 1 点を森下多作より贈られた。従来当湾からセミホウボウ (*Dactyloptena orientalis* (C. & V.)) は時々漁られたが、ホシセミホウボウは今回が始めてと思う。特徴は後頭に 1 遊離棘がある (セミホウボウでは 2 棘) のみで直ぐ区別がつく。方言も同様ツバクロである。

測定：全長 ca. 155 mm. ID. V; IID. I~8; A. 6; V. I~4, P. 33.

「最大は阿部氏によると 300 mm になる由」。

611'. ナンヨウトラギス (イバラトラギス) *Chrionema chrysereis* GILBERT.

1957 年 8 月 17 日三津水族館で目撃した 1 尾は明かにアイトラギスではなく、その当時の手記を下に公表すると

水族館で始めて見た。全長目測 190 mm 位で、一体に帶赭黄褐色の地 (アイトラギスの如く緑黄褐色でない) に栗色の巾広の 5 横帶あり、各帶間には淡黄褐色斑があり、側線下方にはこれも横帶の間に 6 小暗色綫斑があり、最後のものは尾鰭にかかるて見えた。虹彩は殆ど黒色。受口にて上顎主骨後端に 1 肉質皮弁はない。D. の第 1 棘は内方に著しく曲っている。側線は体側の下方を通る。

以上を蒲原 (1950, 1955), 阿部 (1957) 両氏の図と比し色彩上の完全な一致は見られないが、この種と同定すべきと思われ、又松原氏 (1938, 1955) の記載によっても同 1 種らしい。

従来の分布はハワイ (基産地), 熊野灘 (松原, 1938, 1955) 及び高知 (蒲原) であり、駿河湾からは上記の 1 例が最初であろうと思う。

附記—28. ヒメクロザメ *Fuji aspinosa* OSHIMA, 1938—焼津にて 2 尾「原文のまま、その後 *Fujia spinosa* とされたもの又は *Fujia aspinosa* とされたものもある」阿部博士 (1962) は “Suruga Bay” としてツラナガコビトザメ *Squaliolus laticaudus* SMITH & RADCLIFFE, 1912 を「魚・雑」viii (5-6): 147-151, 1962 に発表されている。以上の 2 つの学名が同一種の魚を指すか否かについては尚ほ今後の充分なる調査を必要とすることをここに附加する。

Résumé

Part 17 of the article contains 7 new additions to the list of the Fishes of Suruga Bay, Japan, bringing up the total number of the fish fauna in this bay, including of the freshwater species found near the coast, to 895. The interesting additions are *Diaphus tanakai* (formerly known only from the southern coast of Kyushu, Japan), *Lepidocybium flavo-brunneum*, *Chriponema chrysereis*, *Squaliolus laticaudus*, etc.